主日礼拝説教「それでも待つ、ということ」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年8月20日

【使徒書日課】ヤコブの手紙　1章19～27節

19わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。20人の怒りは神の義を実現しないからです。21だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。

22御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。23御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。24鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。25しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。

26自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。27みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です。

【福音書日課】ルカによる福音書　13章1～17節

1ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。2イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。3決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。4また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。5決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

6そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。7そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』8園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。9そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

10安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。11そこに、十八年間も病
の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすこ
とができなかった。12イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治
った」と言って、13その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっす
ぐになり、神を賛美した。14ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をい
やされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間
に来て治してもらうがよい。安息日はいけない。」15しかし、主は彼に答え
て言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろば
を飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。16この女はア
ブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であ
っても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」17こう言われる
と、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなさった数々のす
ばらしい行いを見て喜んだ。

来年は実がなる？【こども説教のために】

今年の夏、こどもの教会（教会学校）では、「ヨナ物語」をテーマにしてきました。7 月には、みなでペープサートの舞台装置を作り、サマープログラムの一日で「映画」の撮影にも挑戦しました。撮影した動画を青年が編集してくれましたので、今日から完全版を YouTube で限定公開しています。

「ヨナ物語」では、イスラエルの預言者ヨナが、敵国アッシリアの都ニネベに行って神の裁きを告げ、人々に悔い改めを促します。ニネベの人々は王も含めてただちに四十日の断食をして悔い改め、神の裁きを逃れることができるのですが、預言者は気に食わないのです。預言者は、いったん滅ぼすと裁きを決定された神が初志貫徹すべきだと考えたのでしょう。あるいは、敵国人の悔い改めなど信用ならないと思ったかもしれません。しかし、神はニネベの人々の悔い改めを認めて、彼らを滅ぼさず生かしておくのは当然だと、預言者に告げられました。

主イエスは、だれでも悔い改めなければ滅ぼされてしまうだろうと警告されます。その一方で、「いちじくの木のたとえ」をお語りになられて、神はご自分の植えたいちじくの木を、実を結ぶようになるまで忍耐してお待ちくださるだろうと教えるのです。いいえ、神が「その木を切り倒せ」とおっしゃっても、ご自分が「このままにしておいてください」と執り成して、実を結ぶようになるまで世話をなさるつもりだとお考えなのかもしれません。

神が「天の父」であられるならば、神に造られた人は「神の子」に他なりません。主イエスは、わたしたち皆を、「神の子」として「天の父」の御心にかなった実を結ぶ人生を生きるようになる「神の国」へとお招きなのです。

御言葉を行う

こどもの教会（教会学校）では、今夏も、人生の先輩からかつて日本が戦争をしていた時代のことを聞き、共に「平和」について考える機会を設けました。わたしたちがこの国に生きる者として社会を受け継ぎ、人の営みを受け渡していくのであれば、わたしたちの先達が語る言葉を聞き、受けとめ、語り直し、次世代に語り継ぐのは、当然のことでしょう。残念ながら、この数世代は、この国も世界全体も、あまりに早い社会の変化に翻弄されて、旧世代の言葉は軽んじられ、何でも新しい事柄、新しい言説が良いことであるかのようにされてきました。もちろん、すべて伝統を保守することが正しいということではないでしょう。しかし、わたしたちが先達から受け継いできたものをあまりに安易に棄て去ることが、果たして人として正しい道なのか、いよいよ真価が問われる時期を迎えているように思われます。気づいたら後に続くはずの次世代そのものが失われていた、ということになったのでは手遅れなのです。

人は、太古に言葉を獲得したときから、言葉によって造られてきました。それは、当初は一部分であったかもしれません。しかし、時代が下るに従って、わたしたちは、ますます言葉に依存し、支配されるようになってきました。親から受け継ぎ、先達から聞いた言葉によって、わたしたちの思考は造られ、生き方、振舞い方も形作られてきたのです。

「ヤコブの手紙」は、日課箇所の直前で、こう告げています。「**御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです**」（ヤコブ1:18）。「聖書の民」、すなわちユダヤ教徒やキリスト信者は、「聖書」を受け継ぐことを通して「神の言葉」を世代から世代へと語り継いできました。わたしたちは、先達と共に「聖書」に耳を傾け、教会の営みの中で先達の説き明かす言葉を、「神の言葉」として聞いてきました。その「神の言葉」によって、わたしたちは人として造られ、生かされ、歩まされてきたのです。

ヤコブは、「**御言葉を行う人になりなさい**」と繰り返し告げます。「**聞くだけで終わる者**」があまりに多いからです。耳にする言葉が過剰なのでしょう。処理しきれないのです。真面目すぎる者は、言葉に縛られてがんじがらめになって、行動できなくなっているのかもしれません。あるいは、賢い者であれば、自分の好みによって取捨選択しているのかもしれません。いずれにしても、「聖書の民」として生きてきた教会の仲間たちでさえ、今は「**御言葉を聞くだけで行わない者**」があまりに多いのです。

それは、今に始まったことではありません。二千年前の初代教会の時代、すでに、教会はそのような状況の中に置かれていたのです。

縛られていれば、解いてやる

わたしたちは、聞く言葉を選ばなければいけません。語って聞かせる言葉を吟味しなければいけません。少なくとも教会は、「聖書の民」として生きるわたしたちは、次世代のために、子らのために、先達から受け継いできた「聖書」に耳を傾け、そこから説き明かされてきた「神の真理の言葉」を語って聞かせるためにこそ、「初穂」とされているのです。

それを聞くかどうかは、彼ら次第です。無理強いすることはできません。けれども、語り、聞かせるのは、わたしたちです。先達から聞かされてきたわたしたちが語らなければ、だれが聞かせられるでしょうか。

それは、気の遠くなるような営みかもしれません。母教会で高校生、大学生の頃に参加していた「こども会伝道」の活動で、毎春訪問していた房総の小さな教会は、当時すでに片手で数えられるほどの信者を、80 歳を超えた老牧師が何十年も牧会されていました。いわく、「こども会伝道」に来て大勢のこどもを集める青年たちに向けて必ず、「伝道は種まきです」と口を酸っぱくしておっしゃられていました。どれほどの労力を傾けても、実を結ぶようにまでなるのか、だれにも分からないのです。しかし、何年も何十年も経て、まかれた種がどこかで芽を出し、実を結ぶようになることもある。根気よく続けるしかない。老牧師は、若者たちにいつもそのように、言葉だけでなくその生きざまを通して、語ってくださっていました。

振り返って、わたしたち自身が、先達から聞かされてきたはずの「神の言葉」を、どれほどしっかりと受け止め、心に植え付け、実を結ばせてきたかと、自己吟味せずにはいられません。わたし自身の「神の言葉」に対する姿勢は、どうだったのだろうか、と。

「*沈黙の実りは祈り*、*祈りの実りは信仰*、*信仰の実りは愛*、*愛の実りは奉仕*、*奉仕の実りは平和*。」あのマザー・テレサがご自分の名刺に記していた言葉です。初めの「沈黙」は、「言葉」を聞くための備えでしょう。彼女は、その活動を進める中で、神の沈黙に悩まされたと語っています。そうであればこそ、「神の言葉」を求めて、いっそう深い「沈黙」を出発点にしないではいられなかったでしょう。それはしかし、実りを結ぶための出発点なのです。愛の実り、奉仕の実り、平和の実りを結ぶために、自分自身のつぶやきや怒りの言葉さえ「沈黙」させることが、ときには必要です。

多くのものに縛られています。多くの言葉に束縛されて、「沈黙」から遠ざけられています。主イエスは、そこから解き放とう、と手を伸べてくださったのです。「自由」にされたとき、わたしたちの心に植え付けられた「真理の言葉」は、はじめて、わたしたちを生かし始めるでしょう。そのときを待ち続けました。あなたのそのときを、わたしたちも待ち続けるでしょう。